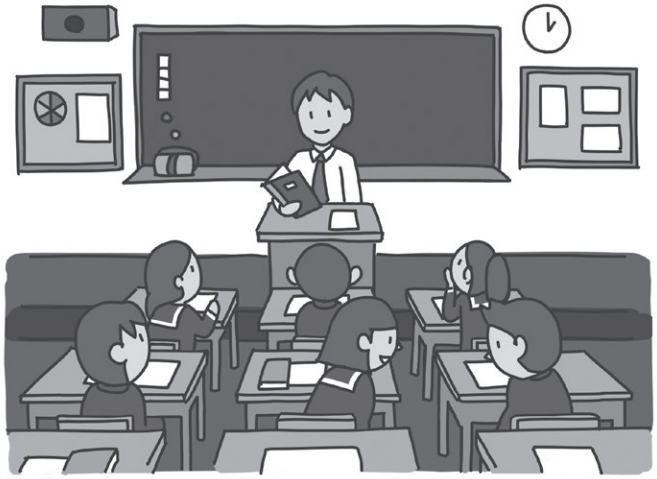
教授用資料

新課程に向けたウォームアップ資料

『地理学習 トラの巻』
～セレクション～

元全国中学校社会科教育研究会会長
赤坂寅夫



帝国書院

『地理学習 トラの巻』セレクション

もくじ

地理の授業のコトハジメ……2
（『中学校 社会科のしおり』2013年度１学期号掲載）

生徒を引きつける導入の在り方……6
―授業のプロローグをいかに展開するか―
（『中学校 社会科のしおり』2019年度２学期号掲載）

教科書・地図帳の資料を活用し，
思考力・判断力・表現力等を育成する①……9
―世界の諸地域編―
（『中学校 社会科のしおり』2018年度１学期号掲載）

教科書・地図帳の資料を活用し，
思考力・判断力・表現力等を育成する②… 12
―日本の諸地域編―
（『中学校 社会科のしおり』2018年度２学期号掲載）

※本冊子の内容は，帝国書院発行『中学校 社会科のしおり』に掲載されたものを一部修正し，合本したものです。

※「地理学習 トラの巻」の全連載のバックナンバーを「指導者専用サイト」に収録しています。詳しくは裏表紙のご案内を参照ください。

地理学習　トラの巻

地理の授業のコトハジメ

はじめに

社会科の先生方の会合で、「歴史や公民の授業は何とか指導できるが地理の授業はどうも苦手である」ということをよく耳にします。とくにここ数年で新規採用の先生方が増えて、この類の言葉がしばしば聞かれるようになりました。東京都の高等学校では、地理の授業を履修する生徒が減少して、地理の学習は中学校でおしまいという心配な傾向が見られます。それだけに中学校における地理の授業は重要であり、生徒にとって有意義で楽しい授業をしてほしいという老婆心からこのコーナーを設けていただきました。

その一　地理の授業とは

一般的に、中学校時代の地理の授業の思い出は？と尋ねると、都道府県名、国名を覚え（させられ）たとか、どこに何があるか、どこでどんな産物がとれるかなどを覚え（させられ）たというお話をいただきます。いわゆる物産地理、暗記中心の地理の授業としての思い出が残っているようです。その時に得た知識が無駄であるなどと、知識そのものを否定するわけではありませんが、これが本当に地理の授業といえるでしょうか。

そもそも地理学習のねらいを一言でいうと「地域の特色を明らかにする」ことであり、「地域の諸事象を地理的な見方・考え方で総合的に解釈する学習である」といえます。中学校・高等学校で学習する地理の内容は、これまで地理学の学問的成果を受けて構成されてきました。その地理学は大きく区分すると地誌学と系統地理学に二分され、戦後の地理学習としては、中学校では地誌学習、高等学校では系統地理学習が主流とされてきました。

ポイント❶

地理の授業とは、
地域の特色を明らかにすること

その二　地理的見方・考え方とは

地理学習では、地域の特色を明らかにするために地理的考察＝地理的見方・考え方の育成が重要です。地理的見方・考え方とは、学習指導要領解説における表現に従うと以下のように示されます。

○地理的見方

どこに、どのようなものが、どのように広がっているのか、諸事象を位置や空間的な広がりとのかかわりでとらえ、地理的事象として見いだすこと。また、そうした地理的事象にはどのような空間的な規則性や傾向性が見られるのか、地理的事象を距離や空間的な配置に留意してとらえること。

○地理的考え方

そうした地理的事象がなぜそこでそのように見られるのか、また、なぜそのように分布したり移り変わったりするのか、地理的事象やその空間的な配置、秩序などを成り立たせている背景や要因を、地域という枠組みの中で、地域の環境条件や他地域との結

び付きなどと人間の営みとのかかわりに着目して追究し、とらえること。

○地理的考え方を構成する柱

・そうした地理的事象は、そこでしかみられないのか、他の地域にもみられるのか、諸地域を比較し関連付けて、地域的特色を一般的共通性と地方的特殊性の視点から追究し、とらえること。

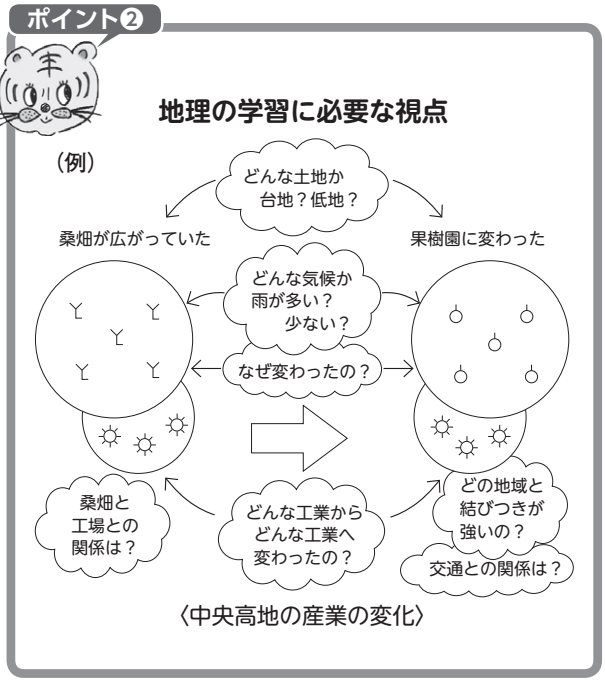
・そうした地理的事象がみられるところは、どのようなより大きな地域に属し含まれているのか、逆にどのようなより小さな地域から構成されているのか、大小様々な地域が部分と全体とを構成する関係で重層的になっていることを踏まえて地域的特色をとらえ、考えること。

・そのような地理的事象はその地域でいつごろからみられたのか、これから先もみられるのか、地域の変容をとらえ、地域の課題や将来像について考えること。　（※下線は筆者）

このように地理的事象を位置や広がり（分布）からとらえ、その背景や要因を自然環境や社会的条件から、また、他地域との結びつきや人々の営みにも着目しながら考えること、そして地域の変容や課題・将来像の面から地域的特色をとらえることが、地理の学習といえます。**What（何が）、Why（なぜ）、How（どのように）、When（いつから）**の問いかけが学習に必要なのです。

その三　基本的知識・技能の定着と作業

地理の学習には地理的見方・考え方が重要ですが、その基盤となる基本的知識・技能が必要です。これまで地理は暗記科目だ、物産地理だと批判されてきましたが、1960年代の私の中高生時代を振り返ると、国名とその位置や産物は今でも頭に残っていますし、雨温図・ハイサーグラフの作成や白地図への着色作業、先生の板書を写して略地図を描く作業は、知識や技能の定着を支えるまさに地理の授業として記憶に残っています。今次改訂された学習指導要領の世界と日本の初発の単元である「地域構成」の学習では、世界や日本を大観し、位置関係や基本的な知識・技能を身につける学習となっているので、ていねいにわかりやすく教え、かつ先生方自身が楽しんでほしいと思います。



その四　地理的技能とは

地理的技能には大きく分けて二つあります。一つは、地理的事象が読み取れたり地域的特色に結びつく事象を見いだしたりすることができる資料、難しい言葉で**「地理情報」の活用に関する技能**です。二つ目は、**地図の活用に関する技能**です。

一つ目の地理情報とは、いわゆる写真や映像、雨温図などのグラフ、統計資料、文章資料などであり、そこから地理的事象を読み取ることが主要な技能です。生徒に読み取らせるためには、とくに１学年の地理学習の最初の時点では、読み取るための視点を与えることや初歩的なアドバイスが必要です。例えば、グラフの場合、「何を示しているグラフか」、「出典は」、「縦軸と横軸の目盛りは何を示しているか」、「グラフの変

化はどうなっているか、なぜそうなるのか」などの問いかけを繰り返すことによってグラフの見方が育成され、やがては問いかけがなくてもグラフから地理的事象とその背景を自ら読み取るようになるでしょう。

写真の読み取りについては、『社会科 中学生の地理』のp.15 ・p.29に詳しく説明されています。写真に写っている景観から自然や衣服、食事、住居の注目するポイントに従って地理的事象を読み取ることができます。その他、写真によっては写っている物や風景、人々のようすからも読み取ることができます。先生方もほかの写真から読み取ってみて下さい。

二つ目の地図の活用についての技能は、地図の読み取りと、表現としての地図化の２種類の技能があります。地図及び地図帳の活用として、まず地図や地図帳に慣れ親しんで、学習や日常生活の中で出てきた地名や国名の位置を自主的に探すことがあげられます。新教育課程になって小学校の段階で地図帳の索引の活用は進んでいますので、中学校入学時に実態を把握しておきましょう。

○先生も地図をつくる、グラフをつくる

地理的技能は読み取りだけではなく、地域的特色を表現する一つの方法として、地図化したり収集した統計資料からグラフをつくったりする技能も含まれます。生徒に調べたことの成果を地図化したりグラフ化したりしてまとめることを求めますが、先生自身も地形図から断面図や土地利用図を書いてみたり、雨温図や人口ピラミッドをつくってみたりすることで生徒の目線に立って気づくことがあるはずです。

○方位やデータの実感をつかむ

先生方は自宅や勤務地以外の土地を歩いているときに「自分は今どの方角に向かって歩いているか」を考えたことがありますか。「今現在の気温は何度ぐらいだろうか」を感じ取ったことはありますか。「学校の敷地面積はおよそ何haか。学校を中心として１㎢はどの範囲までか」、「学校の周辺の人口密度はどの程度か」などの問いかけは、地図や地理の学習でよく出てくるデータを、目に見えるもの実感できるものと理解させるために、先生方自身が把握しておくべき技能といえます。

○計画的に地理的技能を育成する

上記のような地理情報を読み取ったり作図したりする技能、地図を読み取ったり地図化する技能は、一度やればよいというものではありません。基本的知識の定着と同様に、折に触れて繰り返し行う必要があります。生徒の技能の定着の度合いを測りながら柔軟に活動を組み入れることが必要ですが、いつかできるとかいつでもできるなどと思っていると、結局やらずに終わってしまい、生徒に技能が身についていない結果となります。やはり意図的計画的にどの単元どの時間でどの技能を身につけるさせるかという指導計画を立てることが重要です。

ポイント❸

地理的技能では
①地理的事象の読み取り
②地図の読み取り、地図の作成
が必要

その五　２年間の指導計画を立てよう

歴史的分野の授業は歴史の流れを系統的に扱うので、ある程度見通しをもって、１学期は○○の時代まで、１学年最後までに○○の時代まで終わらせられれば・・・と計画を立てられます。しかし地理の授業では、世界も日本も地域を区切って学習し、内容も必ずしも系統的ではなく、細切れの学習を繰り返すイメージで流れをつかみにくく、計画が立てにくいとよくいわれます。この章では、地理的分野の２年間の指

導計画の立て方について考えていきましょう。

○世界と日本の二本立て※

中学校における地理の学習は、２年間で世界と日本の学習を120時間で行います。大きくとらえると右表のように１学年で世界について、２学年で日本についての学習を行います。大まかな流れで見ると、①世界も日本も大まかな位置や枠組みをとらえる地域構成→②州や地方ごとの地誌学習→③調べ方・学び方を学ぶ地域調査と３部構成になっています。歴史的分野の学習（130時間）を３学年で40時間履修するとして、残り90時間を学校によっては、地理と歴史の１・２学年での配分を以下のように考えられます。

（例１）

１学年	地理　75	歴史　30
２学年	地理　45	歴史　60

（例２）

１学年	地理　50	歴史　55
２学年	地理　70	歴史　35

やや極端な例ですが、地理の学習を１学年あるいは２学年のどちらで多く時間を取るかで右の表の配分も変わります。日本地誌の学習や身近な地域の調査の学習において、地理的見方・考え方や社会参画の視点の学習を重視するなら（例２）の配分が考えられます。 右記の指導計画は、（例２）の配分に近い例といえます。

大まかな２年間の指導計画が立てられた後、中単元や世界の各州・日本の７地方の時数を再検討する必要があります。世界や日本の地域構成を学習する際には、地図やグラフの読み取り等、地理的技能を身につける学習を重視する観点から、時数を多く取る必要があります。また、世界の各州や日本の地方の学習の際には、どの州も地方もほぼ同じ時数で同じようなリズム・内容で学習を繰り返すのでは、かつての網羅的・羅列的な学習に陥ってしまいます。

この時間では、地図の読み取りを、この時間ではグラフの読み取りを、この時間では知識・概念の定着を図る、この時間では思考・表現の活動を取り入れた学習活動を、というように内容的にメリハリを、時数的に軽重をつけた指導計画を考えることが大切です。

【地理的分野の大まかな指導計画】

（３学期制の例）

第１部　世界のさまざまな地域（１学年）

〔１学期〕１章　世界の姿（８時間）

　　２章　世界各地の人々の生活と環境（８時間）

〔２学期〕３章　世界の諸地域（19時間）

〔３学期〕　　世界の諸地域（７時間）

　　４章　世界のさまざまな地域の調査（４時間）

第２部　日本のさまざまな地域（２学年）

〔１学期〕１章　日本の姿（５時間）

　　２章　世界と比べた日本の地域的特色（16時間）

〔２学期〕３章　日本の諸地域（20時間）

〔３学期〕　　日本の諸地域（14時間）

　　４章　身近な地域の調査（８時間）

※実質的な時数として行事等の時数を勘案し、合計は120時間になりません。

※この「地理の授業コトハジメ」は、『中学校社会科のしおり』2013年度１学期号掲載のため、地理・歴史の時間数については、現行学習指導要領に基づいております。
新学習指導要領および、移行期間中の時間数の詳細につきましては、弊社ホームページの【中学校の先生のページ→　新学習指導要領関連資料→中学校社会科移行資料】をご参照ください。

地理学習　トラの巻

生徒を引きつける導入の在り方

―授業のプロローグをいかに展開するか―

その一　授業における導入の意義

プロローグ…「音楽・戯曲・小説などで，作品全体の流れや意図を暗示する前置きの部分」（広辞苑 第七版）という言葉が示すように，私たちは作品を鑑賞するときにプロローグの部分で作品に対する期待をもち，引き込まれていきます。学校での授業も同様に，導入の部分で単元や１時間分の授業への期待を高めます。逆に考えると生徒の興味・関心を引き出せない導入は意味がないといえます。導入のよし悪しがその後の授業の展開や生徒の学習活動に大きな影響を与えます。

１単位時間のごく一部でしかない導入部分ですが，どの教材を提示しどう問いかけて生徒の興味・関心を引き出そうとしているのか，授業者の指導観・教材観が導入における工夫に表出されるのです。

ポイント❶

導入は，その授業を価値づける

その二　興味・関心を引き出す教材の提示と発問

授業における導入の意義は先ほど述べたとおりですが，それでは生徒の興味・関心を引き出すためにはどのような工夫が必要でしょうか。生徒がおもしろいと思う教材（資料）を用意し，おもしろい問いかけをするだけでよいのでしょうか。「導入」とは本題に導き入れることであり，本題とは授業のねらいであることから，単におもしろいだけではなく授業のねらいに迫る教材であり発問でなければなりません。

「おや？」，「なに？」，「えっ，本当に？」などの生徒の素朴な疑問を引き出し，それに対して「なぜ？」，「どのようにして？」などの問いかけで生徒の思考を導き，その後の学習への意欲を高めることが大切なのです。しかし社会科の授業では社会事象の認識をねらいとしているので，単に生徒がおもしろいと思う教材や発問では社会科の学習としては不十分です。「おもしろい」の後に「よし，やってみよう！」と追究意欲をかき立て追究を持続させるエネルギーをもたせるだけの教材と発問の質が求められます。これまで私が参観した社会科の授業研究の際に好評を得た導入時の教材と発問は，生徒の予想と事実とにズレがあり，結論が思いがけないもので，生徒にとって矛盾や意外性が感じられるものです。生徒は，自分の経験や既有の知識や見方・考え方では解釈できない意外な事実や事象に出会うことによって追究意欲がかき立てられるといえます。また追究によって得られる結論＝答えが，書籍やインターネット等で生徒自身の手で収集でき，生徒の思考で論理的に導かれたものであることが，社会科の学習として求められる導入時の教材と発問の質といえます。生徒の疑問（？）を引き出す教材と発問で学習意欲を喚起し，最後に「なるほど！」と納得する解に導く学習展開につなげる導入として

いきましょう※。

生徒の興味・関心を引きつける教材としては，意外性の強い教材が効果的ですが，このような教材を用意するには常日頃の教材研究，情報収集力が必要です。授業者自身が関心をもって，新聞，テレビ，書籍，インターネット等に目を通し，授業に活用できる資料を収集し，その中から導入として活用できる資料を教材化し，生徒の学習意欲を喚起する発問を吟味することが求められます。また，教科書や地図帳の資料にも生徒の興味・関心を引く導入のしかけがあるので，ぜひこれらも活用して導入を工夫していきましょう。

写真　『社会科 中学生の地理』p.37「④乾季と雨季のトンレサップ湖の風景」（カンボジア）（写真：久保 純子）

ポイント❷

〈？〉から〈！〉へと導く教材の提示と発問がよい導入のKey Point

その三　教科書・地図帳の資料を活用した導入

（1）写真の比較から疑問を引き出す事例

比較，関連，変化，類推，予想，分類，総合などの思考活動のなかで最も容易であると考えられるのは，比較とされています。例えば二つの資料を比較することでその違いを把握し，その違いの要因（原因）を探る思考活動です。この思考活動を導入として活用します。

○『社会科 中学生の地理』（以下，教科書）p.37「④乾季と雨季のトンレサップ湖の風景」（写真）

※授業では「乾季」「雨季」の表示を隠した二つの写真の拡大を提示しておきます。

T（授業者）：この二つの写真は，同じ地域の３月と９月の写真です。二つの写真を比較して，目立つ違いは何ですか？

P（生徒）：３月は地面が見える。９月は水でおおわれて湖のようになっている。洪水？

T：洪水ではありません。毎年この時期になるとこのような現象が現れます。なぜ，このような現象になるのでしょうか？

P：雨がたくさん降る。

T：どれくらい降るだろうか？９月の写真を見て，気づくことは？

P：大きな船が浮かんでいる。

T：船の大きさから水深はどれくらい？

P：深そうだよ。

T：我が国の梅雨や台風のときと同じくらいの降水量による増水なのかな？『中学校社会科地図』（以下，地図帳）p.12の雨温図で東京とバンコクの９月の降水量を比較してみよう。

P：東京の２倍近い降水量です。

T：東京の梅雨や台風の時期の２倍近くの降水量だね。タイやカンボジアでは，これだけの雨が降る時期と東京の冬の時期よりも雨が少ない時期があるね。なぜ，このような現象になるのかな？この原因を調べてみよう。

この事例では，アジア州の自然環境の学習において，上記の写真を活用して，雨季と乾季との違いに着目させ，アジア州の気候に影響を与えている季節風（モンスーン）の存在に気づかせる学習活動を導入としました。２枚の写真の違いの中でとくに雨季の船に着目させ，雨季の降水量の多さを生徒に実感させることで以後の学習への追究意欲を引き出していく導入です。

ポイント❸

写真の読み取りは，思考の広がりにつなげる視点を明確にすること

（2）世界の州や日本の地方の導入写真ページを活用した単元の学習の導入

各州や各地方の導入写真ページの写真は，そ

※「？」から「！」へ：全国中学校地理教育研究会主催［フィールドワーク in Japan］のスローガン

れぞれ自然環境と生活，歴史や文化・宗教，産業と生活など，その地域の特色を示した写真となっており，その後の学習につながる意図を含んでいます。それぞれの写真が示している場所の位置を地図上で確認して州や地方の広がりを確かめるとともに，写真が示している事象から自然環境と生活，文化・宗教，産業の多様性に着目させましょう。とくに世界の各州の導入では，導入写真ページの写真を眺めて，「知っていることは？」，「気がついたことは？」と問いかけることで，生徒自身の思いとのズレや意外性に気づかせ，その後の学習への関心・意欲を高めることが大切です。

〇教科書p.64～65「アフリカ州」

T：①～⑥の写真を見て，気がついたことは？
P：①の写真では，象がいて，暑い地域だと思っていたけれど，山に雪がある。②と⑥の写真は暑そうだよ。⑤の写真でも熱帯性の作物が見えるね。
T：そう。p.65の地図を見ると①の写真は赤道の付近であることがわかるね。それなのになぜ，山には雪が降るのだろう？アフリカの気候について調べてみよう。

アフリカ州は熱帯や乾燥帯で雪は降らないという生徒の思い込みを予想し，赤道付近でも高山気候や高原のサバナ気候に気づかせ，アフリカ州の気候の学習につなげていきましょう。

中国・四国地方の事例では，他地域との結びつきにつなげる導入として次のような問いかけが考えられるでしょう。

〇教科書p.182～183 「中国・四国地方」

T：①，②，④の写真及びキャプションに共通することは何ですか？
P：海上交通
T：そう。昔から海上交通がさかんな地方だったのかな？では，①の写真に示されている連絡橋はなぜつくられたのだろうか？①と⑤の写真の関連を考えてください。
P：⑤のビニールハウスでつくられた作物が①のしまなみ海道を通って運ばれているのではないか。
T：どこへ運ばれているのかな？中国・四国地方は交通＝他地域との結びつきという視点で調べていこう。

（3）地図帳の鳥瞰図を活用した単元の学習の導入

地図帳のp.25～26（中国とそのまわりのようす），p.51～52（ヨーロッパのようす），p.63～64（アメリカ合衆国のようす）の３か所に鳥瞰図が掲載されています。鳥瞰図は地形の起伏がわかりやすく表現されており，一般図よりも高低差が読み取りやすく，とくに山脈・高原がわかりやすいことが特徴です。この特徴をいかして地形の学習の導入を工夫しましょう。

〇地図帳p.25～26「中国とそのまわりのようす」

※１人はp.25～26を，その隣の席の生徒はp.23～24の東アジアの地図を開き，２人１組となって両方の地図を見比べながら作業する。
T：長江（チャンチヤン）を河口のシャンハイから上流まで指でなぞってごらん。河口の部分で何か気づくことはないかな？
P：河口の幅が広い。
T：日本の地図と比較してごらん。
P：途中に大きな湖がある。大きなダムもある。
P：山々の間を曲がりくねって流れている。
P：チベット高原の中までたどり着いたよ。
T：およそどれくらいの長さだろう？ p.23～24の地図で日本列島と比較してみよう。
P：地図帳p.156の統計資料では長江の長さは6380㎞だよ。日本列島のおよそ２倍の長さだ。
T：この鳥瞰図から川の長さ，山脈の長さ，平野の広さを想像してみよう。

鳥瞰図は地形の起伏を強調して表現するために面積・距離等は正確ではありません。よって広さや長さを比較するときには，一般図を活用して照合しながら作業をする必要があります。この事例では，読み取りやすい河川をなぞることでその長さや流域の広さ・景観を実感させ，地形の学習の意欲を引き出すようにしています。

ポイント❹

導入では，地域のイメージを広げる問いかけ，作業を工夫すること

地理学習　トラの巻

教科書・地図帳の資料を活用し，思考力・判断力・表現力等を育成する①

―世界の諸地域編―

その一　「地理的な見方・考え方」を働かせる資料の読み取り

このたび改訂された新学習指導要領では，各教科で「知識及び技能」，「思考力・判断力・表現力等」，「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に基づいた目標が明記され，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が求められています。その際，深い学びにつながる各教科等の特質に応じた「見方･考え方」を働かせることが重要であると指摘されています。地理的分野の学習においては，「地理的な見方・考え方」を働かせて社会的事象をとらえ考えることが大切です。すなわち，写真，地図，統計・グラフ，文章等の資料から地理的事象を読み取り，位置や空間的な広がりに着目し関連性･関係性等を思考する学習活動が重要なのです。

「地理的な見方・考え方」の育成には地理的技能が重要であり，その育成の仕方についてはこれまでも「トラの巻」でたびたび示してきました。とくに『中学校社会科のしおり』2014年度１学期号～３学期号「トラの巻④～⑥」「地理的技能の基礎・基本①～③」で詳しく述べています。ぜひ参照してください。

ポイント❶

思考力の育成には，資料の読み取りが重要

そこで今年度の「トラの巻」では，今使われている教科書や地図帳の資料を活用して思考力・判断力・表現力等を育成する実践例を，３回の連載で示していきたいと思います。今回は，世界の諸地域から２つの例を示します。

その二　中心資料と中心発問の選択〈ヨーロッパ州－EU統合の課題－〉

一般的にヨーロッパ州の単元では，主題を「ヨーロッパの国々の結びつきとその変化」として地域的特色を理解し，EU統合の利点と課題を考えさせることをねらいとして授業者と生徒との一問一答による展開で学習を進めることが多いでしょう。ここでは生徒主体の思考活動とするため，中心資料を活用した中心発問を投げかけ，さらにそれに関連する資料を活用し生徒自身がEU統合の課題を見いだしていく事例を示します。中心発問とは，本時または単元のねらいを達成するための多様な見方・考え方を引き出す問いかけであり，中心資料とはその問いかけに活用する資料です。

○**中心資料**：『社会科 中学生の地理』（以下，教科書）p.61「⑥EU諸国における1か月あたりの最低賃金の比較」（**図１**）
○**中心発問**：「最低賃金が高い国々と低い国々はどのような国々か。その理由と背景を考えよう」
・Q（補助発問）：「最低賃金が最も安いブルガリアは最も高いルクセンブルクのおよそ何分の１の額か」
・Q（補助発問）：「最低賃金が高い国々と安い国々の位置を地図で確認しよう」
※Qは資料を読み取るための補助発問として示してもよい。

◇**関連資料**：『中学校社会科地図』（以下，地図

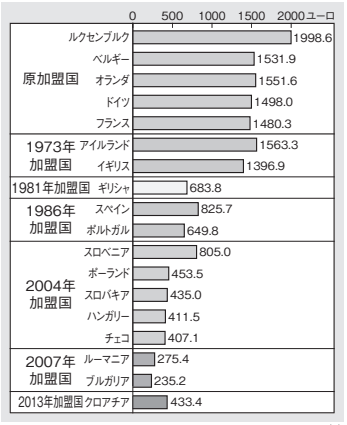
帳）p.51「②EUの加盟国」
→Q：「EUはどのように拡大したのだろうか」

◇**関連資料**：地図帳p.51「③国による経済格差」（**図２**），地図帳p.53「①工業生産額」
→Q：「工業のさかんな国はどこか」，Q：「工業と国内総生産額との関連を考えよう」，Q：「これらの図と教科書p.61『⑥EU諸国における１か月あたりの最低賃金の比較』とを照合してみよう」

◇**関連資料**：地図帳p.53「③労働者の移動」
→Q：「労働者はどのような国からどのような国へと移動しているか」，Q：「なぜ，労働者は移動するのか」

上記の関連資料を比較・関連・照合し，まずは個人で根拠となる資料を示しながら中心発問に対する解答を考えさせ，その結果をグループあるいは学級全体で発表します。

その後，学級全体で情報の共有と教科書p.61の本文での確認を行い，まとめとしましょう。



❻ EU諸国における１か月あたりの最低賃金の比較（2016年）〈EUROSTAT〉

図１　『社会科 中学生の地理』p.61「⑥EU諸国における１か月あたりの最低賃金の比較」

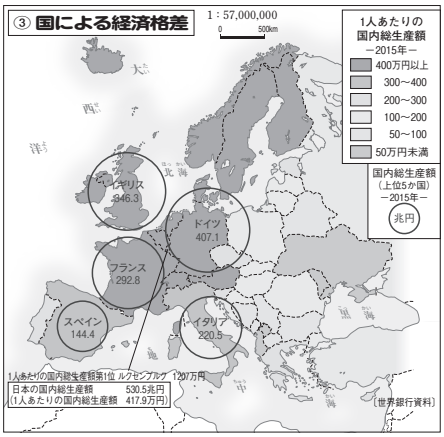


図２　『中学校社会科地図』p.51「③国による経済格差」

なお，資料を読み取って賃金や額，労働者の人数等を比較する際には，これまでの「トラの巻」で示したように日本のデータ等を提示して，それと比較しながらデータに実感をもたせることが大切です。

ポイント❷

思考活動の中心となる資料と発問を選択し，それに関連する資料と発問を構成すること

その三　興味・関心を引く資料を中心資料として活用する思考活動〈南アメリカ州－環境問題－〉

ヨーロッパ州の事例では統計・グラフを中心資料として活用しました。加えて，生徒が「おや？」「これは何？」と興味・関心をもつ資料を中心資料として導入で活用し，追究意欲を継続させることも思考活動には重要です。

それでは，南アメリカ州における教科書の写真資料を中心資料として「アマゾン川流域の熱帯林の減少とその背景」を主題とした事例を示します。

○**中心資料**：教科書p.96「②アマゾン川流域で拡大する熱帯林の伐採」（**図３**）
○**中心発問**：「魚の骨のように見える線は何か」，「この現象（事象）はなぜ起きたのか。この現象はどのような影響を及ぼしているのか」
・Q(補助発問)：「中心から南北にのびる線の長さは何kmか」，「なぜ，魚の骨のように奥にのびるのか」
※魚の骨のように見える線（フィッシュボーン）がアマゾン川流域の熱帯林の伐採によるものであることに気づかせ，伐採の状況の理解と伐採がブラジルの生活や経済に及ぼす影響について，以下の関連資料とそれに関する発問により思考活動を展開して考察します。

◇**関連資料**：教科書p.96「①熱帯林を切りひらいてつくられた製材所」
→Q：「なぜ煙がたっているのか」，Q：「木材は何に加工されているのか」，Q：「熱帯林を切りひらいた地域は何に変わっているのか」

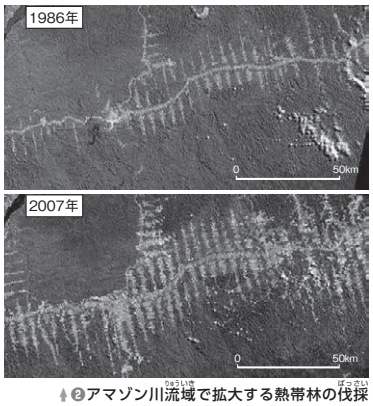
◇**関連資料**：教科書p.97「③アマゾン川流域の開発地域」
→Q：「森林破壊の激しい地域を確認しよう」，Q：「森林木材は何に利用されているのか」，Q：「森林伐採された地域はどのように変化しているか」

◇**関連資料**：地図帳p.68「⑨アマゾン盆地（ブラジル）の森林の減少」
→Q：「森林破壊の激しいところの大きさと同縮尺の北海道とを比較してみよう」

◇**関連資料**：教科書p.97「④アマゾンの森林伐採面積の推移」
→Q：「2005年以降に森林伐採面積が減少しているのはなぜか」「2004年までの森林伐採の目的は何か」
※地図帳p.163の都道府県別統計を活用し，グラフ上の1995年の伐採面積の約３万km^2は，関東地方や近畿地方とほぼ同面積であることに着目させ，伐採面積の広大さに気づかせましょう。

◇**関連資料**：地図帳p.68「⑥ブラジルのさとうきびと大豆の栽培」
→Q：「さとうきびと大豆の栽培が多いところと同ページの『⑨アマゾン盆地（ブラジル）の森林の減少』の『森林破壊の激しいところ』とを照合してみよう」，Q：「2000年以降，さとうきびや大豆の生産が増加しているのはなぜか」

以上のように教科書や地図帳の資料を中心に熱帯林の減少の状況と背景について思考活動をした後に，さとうきびや大豆などバイオ燃料の栽培とパルプの原料となるユーカリの植林による新たな環境問題の発生について，授業者による解説で理解させます。



❷アマゾン川流域で拡大する熱帯林の伐採
（ブラジル） アマゾン川流域を横断する道路から外側に向かってのびる伐採のあとは，魚の骨のように見えることから「フィッシュボーン」とよばれます。

図３ 『社会科 中学生の地理』p.96「②アマゾン川流域で拡大する熱帯林の伐採」

ポイント❸
生徒の興味・関心を引き出す資料を中心資料として活用すること

その四 深い学びにするための資料

新学習指導要領では，単元によっては単元を貫く課題を設定し，追究して自分なりの答えを導き出す「深い学び」を実現することが求められています。例えば，ヨーロッパ州では「EUを離脱しようと考える国が増えているのはなぜか」，南アメリカ州では「アマゾン川流域の熱帯林開発を今後どうするべきか」という課題が考えられます。これらの追究活動には，教科書・地図帳の資料を活用した単元を貫く思考活動の展開・構成，そして思考を深める資料と活動の工夫が必要です。「EU離脱」については支持・不支持のそれぞれの根拠となる資料，「アマゾン川流域開発」については，ブラジル政府，先住民，環境団体，農民，外国政府，外国企業，世界銀行などさまざまな立場の意見，根拠となる資料を示し，まさに多面的多角的に考察する場面を提供することが必要です(注)。

ポイント❹
深い学びにするためには，さまざまな立場からの資料を用意すること

このように，生徒に思考活動をうながすためには，「地理的な見方・考え方」を働かせる資料の読み取り，そのための発問および思考活動の流れとなる展開の構成を考えることが大切です。

(注)〈参考論文〉荒井正剛「『世界の諸地域』学習における価値認識に関わる学習指導について」東京学芸大学研究紀要 東京学芸大学学術情報委員会（2018年）

地理学習　トラの巻

教科書・地図帳の資料を活用し，思考力・判断力・表現力等を育成する②

―日本の諸地域編―

その一　「地理的な見方・考え方」を深める地域の変容

現行中学校学習指導要領解説社会編p.20～21に地理的な考え方の基本として，その地域にみられる地理的事象の背景や要因を，地域の環境条件や他地域との結び付きなどと人間の営みとのかかわりに着目して追究し，とらえることと示され，その地理的な考え方の主要な柱の一つとして「そのような地理的事象はその地域でいつごろからみられたのか，これから先もみられるのか，地域の変容をとらえ，地域の課題や将来像について考えること。」と示されています。さらにp.22には「地域の環境条件，他地域との結び付き，人々の営みが相互に影響を及ぼしながら地域的特色が形成され，変容している。『地域の課題』は，そうした地域の変容や地域的特色をとらえる学習によって見いだされるものであり～」と示されています。これらのことは新学習指導要領（平成29年告示）解説社会編p.36にも「**地域を捉える際には，現在の地域だけでなく，変容してきた，変容していく地域も視野に入れ，過去，現在，将来を見通す観点も必要である。**」と示されています。

地理学習においては現在の地域の景観や特色にのみ目が向けられがちですが，地域の過去の姿を知り，その変容を追うことで地域の理解が深まります。

ポイント❶

現在の景観や特色だけではなく地域の変容を見る目も養うこと

その二　中央高地の産業の変化の追究

産業の変化による地域の変容を読み取る典型的な事例地域として，今回は日本の諸地域から中部地方の中央高地を取り上げます。

中央高地は，前述した地域の環境条件（自然環境・社会環境），他地域との結び付き（交通網の発達），人々の営みが相互に影響を及ぼしながら時代の変化とともに地域と産業の変容がみられる地域です。このことは，『社会科 中学生の地理』（以下，教科書）p.218の表題「内陸にある中央高地の産業の移り変わり」，学習課題「海からはなれた内陸で標高が高い中央高地では，時代の変化とともにどのような産業が発展してきたのでしょうか。」に表れています。この学習課題の答えは，教科書本文に書かれています。しかし教科書の本文をただなぞるだけでは，真の理解にはいたりません。やはり教科書や地図帳に掲載された写真，統計・グラフ，主題図等の読み取りから変容の背景や要因を探ることが本来の地理学習といえます。

ここでは甲府盆地の果樹栽培と諏訪湖周辺の工業の変化を中心に扱います。まず導入として，教科書p.218～219の写真資料から高冷地の自然条件を生かしたレタス栽培と東京大都市圏とのつながり，高山地域の豊かな水の存在とミネラルウォーターの生産，高度な技術による産業用ロボットの生産，ワイン製造につながるぶどう栽培を読み取り，現在の中央高地の地域イメージをとらえます。これらはすべて中央高地の産

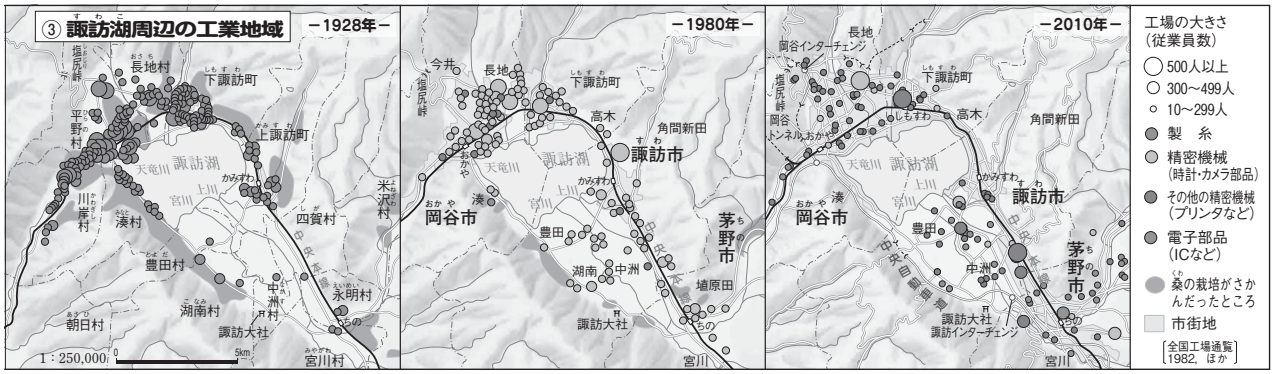


図１　『中学校社会科地図』p.113「③諏訪湖周辺の工業地域」

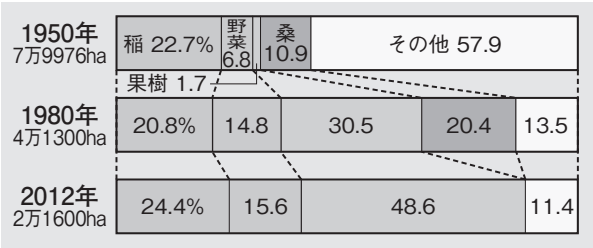


図２　『社会科 中学生の地理』p.218
「④山梨県の農産物の作付面積」

業の変化とつながる要素です。

それでは，地域の変容を読み取り，背景や要因を探るための中心資料と中心発問※1の例を以下に示します。

○**中心資料**：「中学校社会科地図」（以下，地図帳）p.113「③諏訪湖周辺の工業地域」（**図１**），「④甲府盆地の果樹栽培」
○**中心発問**：「甲府盆地の栽培作物の変化と諏訪湖周辺の工業の変化とは関連があります。どのような関連か，考えよう」

◇**関連資料**：教科書p.218「④山梨県の農産物の作付面積」（**図２**）
→Q：「1950年から2012年にかけてどの農産物の栽培が増えているか」，Q「なぜ桑が減り，果樹が増えているのか」
→Q：地図帳p.113「『④甲府盆地の果樹栽培』で1951年から2016年にかけてどのように変化しているのか，確認しよう」
→Q：地図帳p.113「『③諏訪湖周辺の工業地域』の1928年から2010年にかけての変化との関連を考えよう」
→Q：「1928年の図で，諏訪湖周辺に製糸工場が多いのはなぜだろうか。製糸工場の立地に必要なものは何だろうか」
→Q：「なぜ製糸工場が減少し，なぜ戦後は精密機械工場が増えたのだろうか」
→Q：「製糸工場と精密機械工場に共通する立地条件は何か」
※Qは補助発問として資料の読み取りから生徒の興味・関心に応じて問いかけ，示した順序で発問しなくても良い。

主題図の読み取りは，まずきちんとそれぞれの事象を確認したうえで，その変化の背景と要因をじっくり考えさせることが大切です。

ポイント❷

事象の変化をきちんととらえ，その背景・要因を探ること

その三　主題図の背景・要因を読み取る

地図帳p.113「③諏訪湖周辺の工業地域」（**図１**）の1928（昭和３）年の工場の分布を見ると，諏訪湖周辺に多くの製糸工場が集中していることが読み取れます。なぜこのように製糸工場が集中していたのでしょうか。それは製糸に必要な水に恵まれていたことと，内陸で乾燥した気候がまゆを貯蔵するのに適していたという自然的条件，さらに江戸時代の中山道・甲州道中による京都や江戸との流通における立地条件の良さ（地図帳p.103～104「①本州中央部」）や1872（明治５）年には西洋式の製糸工場が建てられたという社会的条件があったからです。

一方，1980（昭和55）年には製糸工場は大幅に減り，2010（平成22）年の主題図ではみられなくなっています。我が国のみならず世界にも

※１　中心資料・中心発問については，『中学校社会科のしおり』2018年度１学期号「トラの巻⑯」で述べています。

通じる近代の代表的な製糸工業地域が衰退したきっかけは，1929（昭和４）年，アメリカ合衆国に端を発した世界恐慌による生糸価格の暴落と輸出不振であり，このことは我が国の「満州」への移住政策へもつながります（『社会科 中学生の歴史』p.222～223参照）。

そして製糸工業の衰退は，戦時中の機械工業，戦後の精密機械工業（カメラ部品や時計など）の発達，そして1980年代以降の電気機械工業（電子部品やプリンタなど）の進出とその発展につながります。部品の洗浄に適したきれいな水の存在とかわいた空気という自然的条件，京浜・京阪神・名古屋に比較的近く交通網で結ばれているという社会的条件があったからです（地図帳p.154）。古くからあった自然的条件と社会的条件の存在が，教科書p.218～219にある現在のミネラルウォーターの生産や産業用ロボットの生産，果樹栽培とワインの生産へとつながっているのです。写真や統計・グラフ，主題図等に示された**一つ一つの事象は，実は多様な糸でつながっている**ことが理解できたと思います。

さらに，資料から事象の背景や要因を生徒に自由に発想させ考えさせることが大切です。地域の変容を扱うためには教科書・地図帳の資料を基礎資料としたうえで，当時の地域のようすがわかり，生徒が納得するための根拠となる古い地形図や統計・グラフ，さらに興味をもつ裏話や歴史的事象・資料を授業者が教材研究で収集し，補足資料として提示することも求められます。その際には，当時の人々の営みがイメージできる具体的なものであることが肝要です。例えば，1920（大正９）年の我が国最初の国勢調査※２で当時の長野県の人口をみてみましょう。岡谷市の前身である平野村の人口は４万4278で，当時長野県一の人口を有していた松本市に次ぐ規模であり，製糸工場の従業員が多く住んでいたことが推測できます。

ポイント❸

生徒が背景・要因を探る補足資料を用意すること

その四　教科書・地図帳の資料から展開のシナリオを描く

地域の変容はほかの地方でも，地域の変容に対する生徒の興味・関心等の実態に応じて扱うことが必要です。例えば，地図帳p.86「⑨シラス台地の開発」から「南九州のシラス台地の開発がどのように行われ，農業が困難な火山灰台地が茶の栽培や畜産がさかんな地域となったのか」，p.126「③北関東工業地域の工場の変化」から「かつての諏訪湖周辺のように繊維工業がさかんであった北関東工業地域が，機械工業中心の工業地域に変化したのにはどのような社会的条件があったのか」，教科書p.200「②京阪神大都市圏と琵琶湖･淀川水系の範囲」やp.231「③東京大都市圏の拡大とおもなニュータウン」から「京阪神大都市圏や東京大都市圏における市街地は時代とともにどのように拡大し，その要因となった社会的条件は何か」といったシナリオが描けるでしょう。現在の地理的事象の特色を教科書や地図帳の写真，統計・グラフ，主題図等から読み取り，その事象の背景・要因を考えさせ，地域の変容から現在の事象を理解させることが社会科の一連の流れとして歴史や公民の学習につながるものと考えます。

その際，前号のトラの巻⑯でも示したように授業者自身が教科書・地図帳の資料をじっくり読み取り，生徒の視点での問いとその学習の展開を構想することが大切です。

ポイント❹

資料から思考・判断・表現のシナリオを構想すること

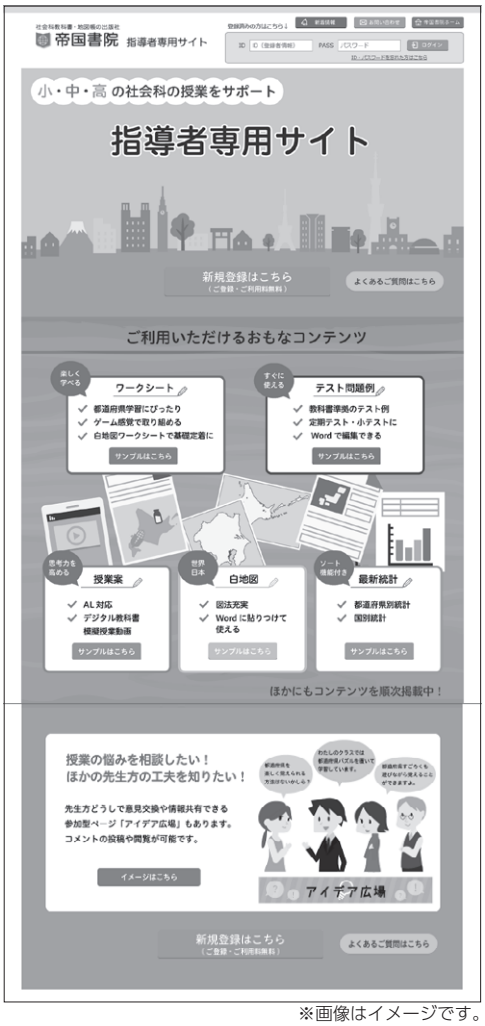
※２　大正９年国勢調査は，「e-Stat 政府統計の総合窓口」で公開されています。

簡単！

指導者専用 サイトのご案内

無料！

帝国書院「指導者専用サイト」では，小・中学校に勤務されている先生方に向けて，社会科の授業をサポートするコンテンツを多数ご用意しています。ご登録・ご利用料は無料です。ぜひ，ご登録ください。



※画像はイメージです。

ご利用いただけるおもなコンテンツ

- その1 楽しく学べる**「ワークシート」**
- その2 思考力を高める**「授業案」**
- その3 写真・動画を収録**「プレミアム写真館」**
- その4 世界・日本の**「白地図」**
- その5 ソート機能付き**「最新統計」**

ほかにもコンテンツを順次掲載中！

＼まずはお申し込みを！／

Step 1

小中学校 指導者専用サイト

スマートフォン・タブレットにも対応

↑帝国書院ウェブサイトトップページのバナーをクリック！

URLはこちら↓
https://www.teikokushoin.co.jp/members/

↑スマートフォン・携帯電話の方はこちらから

Step 2

「新規登録はこちら」から，利用規約にご同意のうえ，必要事項を記入し，お申し込みください。

Step 3

およそ１週間以内に ID，パスワード記載の登録者証をご勤務先へ郵送します！

収録コンテンツのご紹介

※内容は変更・修正する場合があります。

動画

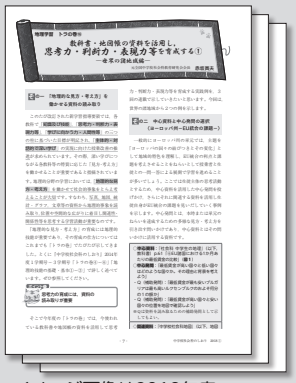
アルゼンチン パタゴニア

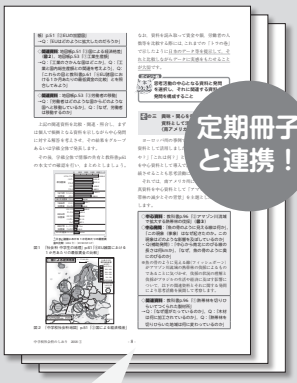
アラブ首長国連邦(UAE)

さらに充実！

登録者限定！ プレミアム写真館に動画を掲載！
世界各地の貴重な取材映像を公開しています！

地理学習 トラの巻





定期冊子と連携！

＊イメージ画像は2018年度
１学期号の「地理学習トラの巻」です。

定期冊子「中学校 社会科のしおり」でこれまで掲載した
「地理学習 トラの巻」の全バックナンバーを収録！

帝国書院 資料編集部
TEL 03-3262-0831　FAX 03-3262-0840
URL https://www.teikokushoin.co.jp/

2020年１月発行

©帝国書院 2020